

海外研修学生の受け入れに関する国際交流委員会の活動 — 2017年度後期と2018年度前期の記録

成田 有吾^{1,7)}, 竹内佐智恵^{2,7)}, 船尾 浩貴^{2,7,8)}, 武田 佳子^{3,7,8)}, 宮田 千春^{4,7)},
大北 真弓^{5,7)}, 水谷真由美^{6,7)}, 小瀬古 隆⁹⁾, 廣畑 静¹⁰⁾

Activities of the International Exchange Committee on accepting short-term international students - Records in late 2017 and early 2018

Yugo NARITA, Sachie TAKEUCHI, Hiroki FUNAO, Yoshiko TAKEDA, Chiharu MIYATA,
Mayumi OKITA, Mayumi MIZUTANI, Takashi KOSEKO and Shizu HIROHATA

Key Words: International exchange activity, Chiang Mai University, Catholic University of Applied Sciences Freiburg), student, nursing

2017年前期分までの活動を三重看護学誌前巻で報告した(成田 他, 2018)。その後, 2017年度には, ドイツ, カトリック応用科学大学から11名の研修生と教員が来学し, 本学からは7名の学部生がチェンマイ大学看護学部を訪問した。続いて, 2018年度には, チェンマイ大学看護学部から7名, およびカトリック応用科学大学から3名が来学し, 本学の学生と教職員8名がカトリック応用科学大学を訪問した。加えて, 2018年度に, 韓国, 慶州にある大学の医学部看護学科からの交流申し込みを受け, 2名の教員が本学看護学科と附属病院を訪問した。各大学別に交流の状況を紹介し, 今後の国際交流委員会の活動について考察した。

1. 大学別の交流状況の紹介

1) ドイツ, フライブルク・私立カトリック応用科学大学との交流

Katholische Hochschule Freiburg (Catholic University of Applied Sciences Freiburg)

(1) 2017年度後期の来学

2017年12月17~24日, カトリック応用科学大学医療保健管理経営(B. A. Health Care Management)学士コースからの11名が, 三重大学医学部看護学科と附属病院および紀南病院を訪問した。訪問メンバーの構成は, エルケデュッシュ(Elke Dusch)教授と, 彼女のゼミに所属する学生10名(男性4, 女性6, 年齢は23-32, 26.2 ± 2.8歳 [平均 ± S.D.])であった。学生は, 全員が何らかの就労資格を持ちながら進学し, 看護学士号の取得を目指していた。彼らの職業背景は, 看護師(6名), 職業教育専門職(1名), 理学療法士(1名), 薬局技術者(1名), 医療マネジメント助手(1名)であった。其々が, 今回の研修を卒業論文に反映させる目的で来日していた。卒業論文のテーマは, 病院経営とIT

- 1) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 実践基礎看護学分野
- 2) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 成熟期看護学分野 (成人看護学)
- 3) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 成熟期看護学分野 (がん看護学)
- 4) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 看護教育学分野 (看護管理学)
- 5) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 母子看護学分野 (小児看護学)
- 6) 三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 地域看護学分野
- 7) 三重大学医学部看護学科 国際交流委員会
- 8) 三重大学医学部医学・看護学教育センター
- 9) 三重大学医学部附属病院 看護部
- 10) 組合立 紀南病院 看護部

機器, AI, およびロボティクスであった。

三重大学における彼らの研修内容は、看護学科紹介、附属病院看護師とのディスカッション、附属病院見学(看護部, 病棟, スキルズラボ [MiT: Mie University Institute of Technical Skill Education] であり、また、鈴鹿医療科学大学にある HAL pit での装着型ロボットリハビリテーション機器 HAL の見学、紀南病院と紀宝町浅里地区訪問も含まれていた。

最終日である 12 月 23 日(土・祝, 13:30~16:30)には、第 3 回日独パネルディスカッションが本学附属病院外来棟 5F ホールにおいて開催され、37 名が参加した。その内容は、① The cooperation between Mie University and Catholic University of Applied Sciences Freiburg at a glance. Elke Düscher (カトリック応用科学大学 教授), ② The Robot will be saving you Now. 宮田 千春 (本学 准教授, 看護学専攻), ③ Innovative Concept of Wearable Robots Powered by Remaining Physical Power Based on Functional Anatomy. 伊丹 琢 (本学 大学院工学研究科 システム工学専攻 博士課程), ④ Challenges & innovation as home-care coordination from Mie University Hospital. 深谷 みゆき (本学附属病院 師長, 医療福祉支援センター), ⑤ Several aspects of home-care supporting by Kinan Hospital. 廣畑 静 (紀南病院 看護部長), ⑥ ドイツ学生 10 名による関心領域の研修内容の披露であった。今回の研修生からは、工学系の知見に対する高い関心が寄せられた(写真 1)。さらに、今回の国際交流委員会の活動は、本学地域拠点サテライト、東紀州サテライト事業の認定を受けることになった。



写真 1 第 3 回日独パネルディスカッション: 2017 年 12 月 23 日, カトリック応用科学大学の学生と参加者の議論

(2) 2018 年度 前期の来学

2018 年度は、9 月 8 日~28 日(3 週間)に看護学専攻学生 2 名と同 9 月 20 日~28 日(1 週間)に教員 1 名 (Elke Düscher 教授) が来学した。この 2 名の看護学生の研修は、カトリック応用科学大学のインターンシップとして単位認定されることになった。しかし、2 名とも臨床歴の長い看護師(臨床歴は其々 20 年と 30 年)で、各自就労を続けながら学士号の取得を目指していた。

この研修では、まず、研修生らは、紀南病院での 2 週間の研修からスタートし、紀南病院が、医療資源の乏しい中で地域の基幹病院として、地域包括ケアを提供している実態を見学した。そして、9 月 21 日(金)、この 2 学生は、「熊野看看連携の会」において、ドイツと日本の医療提供、とくに過疎地での問題について、類似点と相違点に関する発表を行った。9 月 22 日には、本学から学生・教職員 9 名が、紀南地域を大学のマイクロバスを使って訪問し、須崎真病院長と面会のあと、廣畑静看護部長、森本真之助医師とともに浅里地区でのタウンミーティングに参加した。次に、本学附属病院と看護学科における研修が行われ、9 月 28 日金曜日 16:30~19:00、第 4 回日独パネルディスカッションが開催された。附属病院 12 階三医会ホールにおいて、関係者及び外部参加者、計 36 名が参加した。内容は、① Future Challenges in Health Care. Elke Düscher (カトリック応用科学大学 教授), ② Internship in Japan. Christa Maria Scheele, Andrea Uhlmann, (カトリック応用科学大学 第 8 セメスター, 看護学専攻), ③ Issues of Regional Comprehensive Care System in Mie Prefecture. 深谷 みゆき (本学附属病院 師長, 医療福祉支援センター), 小島友輝 (本学附属病院 看護部), ④ Current Situation and Issues in the Local Hospital in Japan. 廣畑 静 (紀南病院 看護部長), ⑤ Integrated care for elderly people in emergency in UK. 森本佳織 (本学 大学院博士前期課程, 看護学専攻) がトピックスを提示し、ドイツにおける緩和ケアや医師による致死量薬物投与の問題(医師補助自殺: physician assisted suicide)に至るまで、各地の高齢化と医療提供に関する問題点の提示に関心が寄せられた。この企画は、本学地域拠点サテライト、東紀州サテライト事業の認定を受けた。

また、これらの研修生の来訪に合わせて、本学の学部 4 年生が卒業研究に関連するインタビューの機会を得ることができた。



写真 2 第 4 回日独パネルディスカッション: 2018 年 9 月 28 日, カトリック応用科学大学の学生と参加者

(3) 2018 年度三重大学学生らによるフライブルク訪問

三重大学関係者 5 名と紀南病院職員の 3 名、合計 8 名が、6 月 10 日~6 月 15 日、フライブルクを訪問した。本学教員が看護学専攻博士前期課程学生 1 名(附属病

院看護部), 学部学生 2 名 (1 年生) を引率し, 附属病院職員 (MSW) 1 名と紀南病院職員 3 名が同行して, カトリック応用科学大学が設定した第 2 回国際週間の企画に参加した. この訪独研修では, 紀南病院の廣畑看護部長と須崎病院長が, 地域包括ケア提供の現状と課題を報告した. その他, 本企画では, 30 カ国以上の参加者とともに, 現在欧州で問題となっている, 高齢化や経済格差のなかでのソーシャルワーカーの役割と機能, 過疎地での医療資源の確保と提供, 移民の福祉問題とりわけ高齢の移民の介護問題, 障がい者をコミュニティで受け入れる体制のひとつとしての健常者一障がい者共同スポーツの紹介と体験, 関係性が不安定になった状況でのコミュニケーション法について議論した. 国際週間の講演と討議のほか, 同大学教職員および学生との交流, ならびに医療施設 (University Heart Center in Bad Krozingen) を見学した.

2) タイ, チェンマイ大学との交流

Faculty of Nursing, Chiang Mai University (CMU)

(1) さくらサイエンスプランとして CMU からの訪問

本学看護学科は, CMU を提携校として 5 年前から, 相互に 1 週間の研修を重ねてきた. 今年度もさくらサイエンスプラン (SSP) の一環 (A. 科学技術体験コース) として, 2018 年 5 月 17 日~24 日, 「科学技術に基づく医学・看護学教育の大学と地域医療現場の双方での体験」をテーマに, タイ, 王立チェンマイ大学看護学部から, 7 名 (3 年生 6 名と引率教員 1 名) を招聘し, 三重大学医学部看護学科を起点に研修と交流を展開した.

研修生らは, 学内では, 先進科学技術を駆使したシミュレーション機器を用いて多様な学習コースを提供しているスキルズラボ (MiT) を訪問し, 解剖実習見学も組み入れて, フィジカル・アセスメントへの効果的な教育を体験した. また, 附属病院看護部の協力のもと, タイとの共同研究を推進している看護師との交流, 院内の先進諸施設を見学した. 学外では, 5 月 18 日, 本学からバスで紀伊半島を南下し, 世界遺産である熊野古道の散策と紀南病院の見学を行った. 紀南病院では, 本学との連携による各種 IT 機器を活用した地域医療支援の医学・看護学研修を見学し, 東南海地震への対策として, 院内・地域における災害医療の取り組みについて, 英語による講義を森本真之助医師から受けた. また, 2011 年 9 月の紀伊半島大水害で甚大な被害を受けた紀宝町浅里地区を訪問し, 地域住民から当時の状況とその後の復興対応を直接聞く機会も得た.

さらに, 5 月 19 日 (土), 第 21 回国際福祉健康産業展 ウェルフェア 2018 (名古屋市ポートメッセなごや) に参加し (写真 3), 福祉・健康関連機器を見学した.

本年もホンダの装着型ロボット機器について, 開発者から英語での解説を受け, 装着・体験した.

また, 5 月 20 日 (日) には, 本学学生とともに三重県立博物館を見学し, 大野照文館長から英語での説明を受け, 標本へも触れた. 帰校後には, 看護学科棟の中庭で, 双方の学生と教員でお好み焼き作りを楽しみ, 文化と歴史の国際的な交流経験を深めた.



写真3 第 21 回国際福祉健康産業展 ウェルフェア 2018 (名古屋市ポートメッセなごや): CMU と本学のチーム

(2) 本学学部生による CMU への研修訪問

2018 年 2 月 27 日~3 月 7 日, 本学教員の引率の下, 学部学生 4 名 (4 年生 3 名, 1 年生 1 名) と附属病院職員 2 名 (看護師 1, 事務系 1) が, タイ, チェンマイ大学 (CMU) 看護学部を訪問し, CMU 附属病院小児科病棟や PICU 等を, 同時期にマレーシアから訪問中の看護学生とともに見学した. また, CMU 外では, 伝統的なタイ式マッサージの施術を各自が体験し, 看護学生によるチェンマイ市内の訪問看護の実習に同行した. CMU において, 学生達は, 日本の医療・看護の提供体制と現状や看護教育などをプレゼンテーションする機会を得た (写真 4). CMU 側からも, 本交流を通じて学生が英語力を高める機会となったことが伝えられた.

本研修期間中, 教員の共同研究の継続についても話



写真4 CMU 渡航研修時の, 本学学生によるプレゼンの風景

し合われた。2016年度から始まったCMUとの共同研究；テキストメッセージを用いた妊婦支援では、三重大学側では児玉豊彦講師を中心とした「チーム BEYOND」の活動が継続され、2018年度末を目処に、データ収集が進められることが確認された。

2018年8月17日～8月24日、本学教員の引率のもと、学部学生4名（4年生1名、2年生3名）、附属病院事務職員1名が訪問した。今回の研修はCMUが、日本からの複数の大学と台湾からの大学の研修を一括して対応する体制であった。2月の訪問と同様の内容の講義と施設の見学が準備されていた。複数の大学との合同の講義や見学の場で、参加学生は質問や発言を躊躇する傾向がみられた。講義や見学の話題になっているテーマに関する基礎的な知識の不足や英語での表現への不安感から、発言したい意欲があったにもかかわらず実践できないことへの悔しさを感じていた。

その他、有志の学生が学生間の交流の場を設定してくれた。講義や見学は他の大学の研修生と合同で進められたが、学生との交流は、本研修の前に三重大学が受け入れたCMUの研修生が本学の学生に対応してくれた。研修最終日にはプレゼンの機会が設定され、学生は、事前の授業での学習を踏まえて準備していた発表内容にCMUの学生たちとの交流で得た文化的差異の学びを含めて資料を整え、英語が堪能な学生を中心として連携してパフォーマンスを発揮した。

本研修の期間中、参加学生が体調を崩す出来事が発生した。安易な飲食行動による中毒症状であった。CMUの研修受入れ担当者が迅速に対応してくれ、学生が加入していた海外保険が適応される医療機関で治療を受け、早期に回復した。しかしながら、発生の経緯が危機管理意識の甘さによるものであり、海外での行動に常に危機管理意識を備えることの重要性を促した。

3) 韓国東国大学校からの締結進捗確認と交流の活性化の申し入れ

Dongguk University

2018年4月に、韓国、慶州の医学部看護学科から、相互交流の提案を受けた。2002年に同大学との協定を締結し合意文書(MOU)も取り交わしているが、これまでは人文学部との交流が数年あるのみで、医学部医学科や看護学科との交流はなかった。スカイプ®による連絡等を経て、2018年7月6日に同大学から2名の教員が来学した。韓国側教員は、本学看護学科と附属病院を視察し、学部学生の交流を強く希望した。

2. 今年度の交流活動から浮上した課題と今後の国際交流委員会の活動

今回の交流活動を振り返り、受け入れ体制、渡航研修支援体制、そして看護学専攻における今後の国際交流のあり様への考察を示す。

1) 受け入れ体制

他国からの研修生の受け入れには、大きくは2タイプが存在すると思われる。1つは、研修生のもつ、未知の国の様子に触れたいという関心に対応するために、受け入れ側が言語的説明や体験の場の設定によりアピールする企画を提示するタイプである。そして2つ目は、研修生が自国の問題点に注目して、他国の情勢と比較検討しながら解決策を探ろうとする場合、受け入れ側がその要望に応じた情報提供をするタイプである。

現在、我々が交流している2大学のうち、CMUは本学学部生と同様、就業経験を持たない学生が大半を占める。他方KHはドイツの大学制度上、学生自身が看護などの職業経験を有している。研修生の特徴に応じたプログラムを考えるうえで、初学者であるCMUの研修生には、日本への関心をもってもらうために1つ目のタイプの対応が適用となり、研修に単位修得が関与した付帯条件があり、関心のあるテーマが提示されることが多いKHの研修生に対しては、2つ目の対応が適用となるといえる。ここでは、それぞれのタイプの対応にテーマを設定することの意義と課題について考察する。

(1) 言語的説明や体験によりアピールできる企画の提示

CMUの研修生の結果に見られたように、初学者の学生が研修において知見を拓き他国への関心を高め、更なる探究心へとつながるきっかけは、人と語り合う交流、共に何かに取り組む体験が効果的であることが示された(表1)。今回、CMUの研修生には、主テーマとして設定されていた解剖学を学ぶこと以上に、地域の高齢者との交流や語り合いが非常に大きな刺激となっていた。ここには高齢者たちが自らの被災体験や復興への気概を伝えたいという強い意思があったことが影響していたと考えられる。このことを参考にして、本学においても「語りたい」「伝えたい」意思を伴ったテーマを明確にする必要がある。ここに、本学の学生が有益に関わることができれば、同様の年代、同様の学習歴をもつCMUの学生と本学の学生双方に成果をもたらすことが期待できる。

当学科では、タイおよびドイツとの4年間にわたる相互交流を経て、2018年度から「看護国際コミュニ

表1 受け入れプログラムの概要と研修生への影響

No.	大学名	テーマ	研修プログラムの場所および概要				研修生からの意見
			看護学科	三重大学 病院	学外施設	県南部地域	
1	KH	病院経営とIT機器, AI, およびロボティクス		MiT 病棟	鈴鹿医療科学大学にあるHAL pit	1日	病院におけるAI導入（電子記録システム化など）への意識の2国間比較の研究に発展
2	CMU	科学技術に基づく医学・看護学教育の大学と地域医療現場の双方での体験	解剖学実習体験 看護学科学生との文化交流	MiT 病棟	MIEMU ウェルフェア2018	1日	If I have opportunity go to Japan, the aims of revisit Japan are to see the elderly care in urban and rural communities and to do research about dementia people (I do the research project with Ishikawa Prefectural University to study the lifestyle of Japanese dementia and Thai dementia now)
4	KH	高齢者への医療, 福祉		MiT 病棟 看護師との意見交換	ドイツと日本の医療提供, とくに過疎地での問題について, 類似点と相違点をまとめて発表	2週間	I'm thinking about Asari, how manage people to live there, dealing with the situation of disasters, getting older, without „young blood“. And how are they dealing with the risk of disability and the need of long term care? Asari might be an example of an ageing Society, so a case studies might be interesting.

KH: Katholische Hochschule Freiburg (Catholic University of Applied Sciences Freiburg) フライブルク・私立カトリック応用科学大学
 CMU: Chiang Mai University Faculty of Nursing チェンマイ大学看護学部
 MiT: Mie University Institute of Technical Skill Education (三重大学医学部附属病院スキルズラボ)
 MIEMU: Mie Museum (三重県立博物館)
 HAL pit: 鈴鹿医療科学大学にある装着型ロボット リハビリテーション機器HALの体験施設
 県南部地域でのプログラム: 紀南病院の見学, 浅里地区での高齢者とのタウンミーティングへの参加

ケーション基礎 (NIB)」と「看護国際コミュニケーション研修 (NIA)」を開設し, 単位認定を開始した. NIBは海外からの来学者との交流を中心に準備して迎え, 双方に有益な結果を残すことを目指し, 8セッションで1単位を与える. このNIBが, 学生に「語り」「伝える」力を育む場となりうると考える. CMUからの研修生を受け入れるプログラム検討と並行して, NIBにおける受講学生のコミュニケーション力の強化を進めることが重要となる. 受講学生と共に「語りたい」「伝えたい」テーマを設定し, 数年単位で内容を充実させる構想で企画を進めることが望ましいと考える.

(2) 研修生からの要望に応じた情報提供者としての対応

KHの研修生は, 問題意識や探究のテーマを認識した状態で研修に臨んでいた. そのため, 情報収集も与えられた情報を得るだけでなく, 自ら探究する姿勢が示された(表1). 受け入れ側はこうした好奇心に対応できる情報源の準備が必要になる. 提示された関心テーマに応じて看護学専攻に存在する領域や分野の協力を得て, 現状を提示できる企画を構築する必要がある. しかし, 限られた資源のなかで研修生側の要望に必ずしも適したプログラムを準備できるとは限らない. そこで, 重要となるのが, 現在4回目の開催となったパネルディスカッションであろう. この発表の機会を通して研修生は何を学び, 何を更なる情報として得たいのかを表明できる. パネルディスカッションの参加者を広く募ることにより, 研修生が研修の見学や体験

企画から十分に得ることができなかった情報も参加者からの助言で補完することが可能となる. KHの研修生の受け入れ企画には本専攻科の学生や三重大学医学部附属病院の看護師との交流, テーマに関連する専門分野の教員との交流を意図的に組み入れることが有益となるといえる.

2) 渡航研修支援体制

各研修での課題は表2に示す通り「語学力不足」「テーマに関する基礎的知識不足」が常に存在している. 特に, 参加学生が低学年であるほど, 看護に関する専門的知見が少ないことが貴重な研修の機会での学びを低減させているのではないかとこの自責感をもたらす傾向がある. その一方で, プライベートの時間で体験を充実させようとするあまり高揚感が高まり「危機管理意識が甘くなる」連鎖があると考えられる. 毎回繰り返される課題を, 支援体制の構築によって改善することが求められる.

2018年度から開講されたNIAは海外への派遣を念頭に, 渡航先の環境・文化・制度等の調査から, 自らのプレゼンテーションの準備を行い, 帰国後の研修内容の発表を含む15セッションで2単位を与えるコース設計となっている. 渡航研修での課題の改善の糸口がNIAの科目展開にあると考え, 以下に案を提示する.

(1) 語学力と研修テーマに関連する基礎的知識の整え

NIAの受講に際しては英語標準テストの点数に基づ

表2 各研修において引率教員から提示された課題

研修	研修の特徴	課題	課題のキーワード
KH	国際週間への参加 KHが提携する約30か国からの参加	・テーマに関する基礎的知識の不十分さや言語の壁に阻まれて、議論をする姿勢に至らない場面が多かった。	● テーマに関する基礎的知識不足 ● 語学力不足
CMU	年度末の研修 国家試験後の研修	・メンバーが4年生を中心とした構成であり、国家試験受験後の本研修に向けての準備に時間をかけることが難しかった。	● 発表準備の時間の不足 ● 語学力不足
CMU	日本からの複数の大学と台湾からの大学の研修を一括して対応する受入体制 本研修前に日本に来学していたCMUの学生との再会と交流 参加学生の体調を崩す出来事	・話題になっている講義や見学のテーマに関する基礎的な知識の不足や英語での表現への不安感から、発言したい意欲があったにもかかわらず実践できない悔しさを感じた。 ・海外での解放感と積極性に常に危機管理意識を備えることの重要性を再認識した。	● テーマに関する基礎的知識不足 ● 語学力不足 ● 危機管理意識の甘さ

KH: ドイツ, フライブルク・私立カトリック応用科学大 (Katholische Hochschule Freiburg : Catholic University of Applied Sciences Freiburg)
CMU: タイ, チェンマイ大学 (Faculty of Nursing, Chiang Mai University)

く基準を提示し、それを超えていることを要件としている。しかし、英語でのコミュニケーションは継続して聞く書く話す行動が不可欠である。現在の科目の構成では、基礎的知識を習得するうえで英語文献の活用を促しているが、読むことにとどまっている。アクティブラーニングの形式を参考にしながら、文献での情報収集、英語での表現と口頭発表を継続的に課すプログラムへの転換を検討する必要がある。

(2) 渡航における危機意識の向上のための仕掛け

渡航研修の直前に文書で海外旅行の諸注意を提示し、危機管理意識の向上を促している。行動に結びつく具体例や、危機意識を高めるための映像資源や体験談を用いた働きかけが求められる。また、委員会においても、現地での多様な危機状況を想定し、連絡網整備、公共機関との連携のシミュレーションも重要となる。

(3) 主体的に学ぶ姿勢の醸成

NIA は学部全学年の受講が可能である。受講者は多様な学年の混成となる可能性があるが、学年にとらわれず、節度ある態度を保ちながらも互いに意見を述べあえる姿勢を促すことが重要となる。複数回の発表の機会を設定し、気さくに質問や助言をし合える対人関係の育成を促すことが求められる。

3) 看護学専攻における今後の国際交流のあり様

以上のように、現在、渡航研修を体験できる関係校があり、体験に単位が伴う科目が設定され、システムの大枠は整い始めた。しかし、実際には、学生は語学

力(英語力)、資金(渡航・滞在費)、機会(規定の実習時期等による渡航困難)の問題により、挑戦することに逡巡を感じている場合もある。考察で提示した対策案を実現するには、なお一層の努力が求められるが、その他にも、挑戦に躊躇する学生の関心を行動化する支援の工夫も求められる。以下に工夫の提案を論じる。

(1) 中核組織の設定と経済的安定化の努力

本学科には国際交流活動を担当する専任や専従の職員は存在しない。教員のうち、当該委員が本務とともに、付加的な教育と調整をこなさなければならない。今後、交流機会を増やすことの必要性は理解しつつも、教員の負担増加は避けなければならない。国際交流を活性化させる土壌造りの一つとして固定した中核組織の設定の検討が求められる。また、活動の資金確保は重要な課題である。公的資金の獲得を目指し挑戦を続けることは必須となる。

(2) 教員の体制強化への努力

本学を訪れた外国人学生達は積極的に学ぶ姿勢を示し、本学の看護学生ならびに教職員らにとっても、大きな刺激となっている。また、今年度も、このようなボトムアップの国際交流を通じて、改めてわが国の医療の長所や問題点に気づけたことが多かった。今後も国際交流活動は重要な取り組みと考えられ、その継続による強化と深化が期待される。目的達成のためには、関係者全体の英語能力の向上、これまでの取り組みの経験知の活用と継承が必要である。

謝 辞

SSP に対してのご支援とご指示をいただいた国立研究開発法人科学技術振興機構中国総合研究交流センター日本・アジア青少年サイエンス交流事業の関係各位、ならびに三重大学での経理、報告書等にご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

また、本学とドイツ、フライブルク、カトリック応用科学大学への相互訪問では、ドイツ学術交流会 (Der Deutsche Akademische Austauschdienst: DAAD) よりご支援をいただきました。申請と交付にあたりご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

利益相反

SSP の資金援助を国立研究開発法人科学技術振興機構から受けた。また、本学国際交流事業支援経費、地域拠点サテライト 東紀州サテライト事業経費ならびに医学部長経費・看護学科長経費から予算に則って資金援助を受けた。他に本報告に関して申告すべき COI はない。

文 献

成田有吾, 竹内佐智恵, 児玉豊彦, 武田佳子, 宮田千春, 服部由佳, 石本恭子, 小瀬古隆 (2018). 海外からの研修学生の来訪と本学からの派遣 2016 年後期から 2017 年前期までの展開. 三重看護学誌. 20 : 97-104.

キーワード：国際交流, チェンマイ大学, カトリック応用科学大学, 学生, 看護

